魔法使いを拾いました

東和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法使いを拾いました

【Ｎコード】
Ｎ０２４５Ｚ

【作者名】
東和

【あらすじ】
七月七日――それは私が鷹夫（たかお）さんと結婚した日。結婚して今日で三年目、私たちは離婚した。そしてその夜、私はごみ捨て場で男の子をみつける。自分を「魔法使い」だと名乗った男の子は、なぜか私の部屋に住み着いた。（浮気、離婚の話があるのでＲ１５タグを付けてます）

1：七月七日

すみずみまで書きもらしがないか確認した。鷹夫（たかお）さんにも確認してもらい、私は印鑑にベットリと朱肉をつけて、自分の名前の横に捺した。

鷹夫さんは、私の顔を見ずにそれをそそくさと茶封筒にしまった。

「ほかに書くものある？」

「ない」

どこか申し訳ない返事。

「なら行くわね。ほかに私がすることはあるの？　あるなら手短にしてくれないかな。用事があるの」

「いやいい。大丈夫だ、なにもない」

すりきれた赤いボストンバックを肩にかついで、三年間お世話になった家に背を向けた。

「縁（ゆかり）、すまない」

ドアを閉める前に、かすれた声で鷹夫さんの声がした。私はふり返らない。

「そんな言葉を吐くくらいなら、プロポーズしてほしくなかったわよ」

七月七日。

結婚式をあげた日と同じ今日、私たちは離婚した。

2：赤い石のピアス

彼が浮気をしている。それを知ったのは、結婚二年目を過ぎてからだった。彼のスーツにブラシをかけていると、胸のあたりになにかがあった。ひっくり返してふるうと、内ポケットから赤い石のピアスがポトッと床に落ちた。

私は、ピアスホールをあけていない。

なら、なんでこんなのがここに？

まさか……浮気なんて。ありえないわ、だって彼は私を愛してるって言ってくれるもの。そんなの、いや、でも。きっと気のせいよ。バカね、私――そう思いたかった。

でも、それはただの勘違いなんかじゃなくて、すべては現実だった。

もともと隠し事は長く隠せない鷹夫さんは、そのピアスについて問いただせば、こちらがびっくりするほどあっさり浮気を認めた。相手は職場の事務課の人で、私より三つ年下の二十三歳。鷹夫さんが勤める会社は、男性ばかりの建築会社だ。少ない女性社員、その中でも相手の女性はかわいらしい容姿でずっと年下。

「気がつけば目で追っていたんだ」そう告白した鷹夫さんの顔は、彼が私に告白したときのそれにどこか似ていた。

3：一ノ瀬鷹夫

「縁ちゃん、やっと名字が七緒（ななお）さんに戻れたねぇ」
私の勤め先は「エコー」という小さな雑貨屋さんで、オーナーは六十を過ぎた吉森（よしもり）老夫婦だ。旦那さんは弥一郎（やいちろう）さん、奥さんはコズエさんという。二人は私小さなころから知っているので、「縁ちゃん」と呼んでくれている。
鷹夫さん……一ノ瀬さんが浮気をしていると知った二人は、私以上に怒ってくれた。わざわざ一ノ瀬さんを呼び出して怒鳴りつけたくらいだ。あのときばかりは、一ノ瀬さんへの怒りがすっとんでしまった。
「あのウジ虫は二十九歳だったよねぇ」
「浮気の相手さんは二十三歳だから、まぁなんというか、若いコならいいのかしら。イヤだわ、ほんとぉに」
「あのウジ虫のせいで、縁ちゃんにバッテンが一つついてしまったねぇ」
「社会的に抹殺されてしまえばいいのよ」
「そうだねぇ」
「いやでも、お二人のおかげで慰謝料とかはたくさんふんだくれましたから」
「当たり前さ！　あのウジ虫からしぼれるだけしぼらないとアタシら、アタシら、うう」
「お母さん、泣くんじゃないよ。縁ちゃん困っちゃうだろぅ」
「わかってるよ。でも、アタシャあ縁ちゃんのご両親になんていえばいいんやら」
早くに私の両親は他界している。二人はそのことを知ってから、私は自分の子どものように可愛がってくれている。一ノ瀬さんとの離婚も、二人がいないとまともにできなかった。
「お二人のその気持ちだけいただきますから」

「そうなのかい。イヤだよ、遠慮はしないどくれね」　二人は、しわくちゃな顔でニコリと笑った。

「もちろんです」

私は、いつもと同じように笑って返事ができただろうか。

4：処分方法

「そろそろ私はお邪魔しますね」
「もう帰っちゃうの」
コズエさんは、まだ話し足りないらしい。
「二人と話してたら、時間がたつのが早くてびっくりですよ。ほら、もう三時すぎ」
「あらあら、ほんとだねぇ」
「それに、ちょっと今日は質屋に行きたくて」
足元の赤いボストンバックを指差した。これは、私の誕生日に弥一郎さんがくれたものだ。愛用して長くなるけど、まだまだ現役で活躍してくれる。
「一ノ瀬さんに私があげたものとかを売りにいくんです。慰謝料もしっかりもらってるけど、なんだか一ノ瀬さんのものにしておくのがもったいなくて」
私が一ノ瀬さんからもらったものは全部置いてきた。慰謝料金額が決定したとき、一ノ瀬さんは顔が真っ青になっていた。彼だけじゃなく、浮気相手の人もそれは同じ。実際の金額より安く慰謝料を見積もっていたんだろうからね。
まあ、ご愁傷様よ。
そのときに、「私が一ノ瀬さんにあげたものはもっていきます。私がもらったものは置いていくから、別に問題はないでしょう？」
彼は、ただ首を縦にふるだけで返事をした。
「ブランド物もあるから、けっこうな額になるはずなんで。それでプチ旅行を計画したいんですよ」
「いいねぇ旅行。僕もよくお母さんと旅行をしたよ」
「お父さんはいっつも迷子！　しまいには迷子札を持たせてね」
「違うよ、お母さんが迷子になってたんだよ」
「迷子になる人はね、みなそう言うのさ！」

照れた顔で弥一郎さんが「それはもう聞きあきたよ」とそっぽを向いてしまった。
うらやましいなあ。
私も、いつかこんなふうに鷹夫さんと年をとって……。
「縁ちゃん？　どうかしたの？」
「や、なんでもないですよ！」
「そぉかい？　気をつけて帰るのよ」
「相談にはいつでものるからねぇ」
「じゃあ、また来週に」
一週の休みの間に、一ノ瀬さんをちゃんと愛してましたといえるようになろう。
いえるようにならなきゃいけないんだから。
浮気がわかってからのゴタゴタと、浮気相手とのゴタゴタを心配する必要はもうない。肩にのっていた漬物石みたいな重さはどこかにとんでいった。
今日で、私たちは赤の他人になった。なったんじゃなくて、戻ったというのかもしれない。彼と、「一ノ瀬鷹夫」という男性と出会う前に戻っただけ。
「実は、まだ、彼との愛を捨てれない、でしょう」
いやらしく私の心が笑う。
うるさいなあ。ちょっと黙っててよ。
そいつは細く笑い声をあげながら、胸の奥底にひっこんだ。

5：ごみ捨て場

時刻表は九時すぎ。こんな時間になってから、お風呂場の電灯がきれていたのをおもいだした。近くの家電屋さんがたしかまだ開いていたはずだったから、財布をひっつかんで急いだ。

無事に電灯は買えた。

買えたはいいんだけど、これはないよ。

「ウソでしょーもう！　雨がふるなんて聞いていないわよ！」

着ていた薄手のシャツを頭からかぶって、土砂降りのなか走りぬける。雨で服がべったり肌にはりついて気持ち悪くてたまらない。夏なのが救いかも。もっと気温が低いときにこんな状況になっていたら……うん、間違いなく風邪だわ。

道は真っ暗で走りにくい。街灯はあるけど数は少なく、それにくわえてブツンブツンと点滅しているから頼りにならない。唯一ちゃんとついてるのは、もう少し先にあるごみ捨て場のだけだ。

「いやー！　もう雨きらいー！」

やっとごみ捨て場の街灯が見えた。そこを曲がってちょっと走れば、もう我が家だ。

さあ、ラストスパートをかけるのよ縁！

地面をけるたびにとびちる水溜まりを気にする余裕はない。もうびしょ濡れだから、いまさらどう濡れようが関係ないし、なにより早く帰りたい一心でスピードをあげた。

「あと、少し――みぃぃっ！」

足元をみてなかったのが悪かった。ごみ捨て場をすぎようとしたちょうどそこで、なにかに足をとられて豪快にこけた。

痛い、地味に痛い！

電灯が割れるのを死守するために、両手が使えなかったのが悪かった。顔面からこけるのはまぬがれたけど、あごと二の腕、そしてひざがジクジクと痛い。

「あうう。いったいなによぉ」
こんなに盛大にこけるとか、いつぶりだっけ。
私をこんなにしやがった原因はなによ！
「あ、ぅえ？」
薄汚れた灰色のかたまりが落ちていた。
「なにこれ、え、え」
雨でぐっしょりに濡れていて、泥だらけのその物体。
ごみ捨て場から半分はみでた形で、それはあった。

6：きたない男の子

大きさは中型犬より少し小さいくらい。そんな大きさ。半分以上が道にはみだしている。
なぜだかそのかたまりが気になった。
私は、おそるおそるそれに手を伸ばした。
薄汚れた布はずっしり重い。けっこうな厚さで、たぶんカーテンとかかな。
それのはしをつかんでゆっくりひいた。
「雨のせいで重いわね。よっ、と！」
ぐるり。
中身がむこう側にころがった。
はじめに見えたのは、砂利がからまった赤茶げた糸みたいなの。
ぐるり。
つぎに見えたのは、その糸がだんだん増えて束になっているもの。
ぐるり、ぐるり。
最後は一思いにひっぱった。
「ひ、ひいぃっ」
おとこ、のこ。
赤茶色の髪の男の子が、くるまっていた。
「に、人形よね。まさか、ほんとは、人間でした、なんてオチじゃないわよ、ね」
真っ白をとおりすぎて青くなっている頬をつついてみた。
やわらかい。
「人間！？　男の子！？」
いそいで生きているか確認した。
呼吸はちゃんとしていた。けど冷たすぎる。体冷たくて温もりがまったくない。
「ぼく！　しっかりしなさい！　おきて！　寝てないでおきなさい

！」
顔にはりついた髪と砂利をぬぐってやる。頭をもちあげて抱えあげると、体がすごく軽い。すりきれた長袖のシャツからのぞく手首は細くて弱々し。よくみれば裸足だ。
「うぅ」
か細い声がきこえた。
なんとか目をあけてもらわないと！
「ぼく、ぼく。しっかりして。だいじょうぶだから。ほら、おきなさい」
「ぅあ、あ゛」
大きく背中をのけぞらせた男の子。苦しげな表情が、私を嫌な気持ちにさせる。
ふるふるとまつ毛はふるえた。ゆっくりまぶたが開く。
鋭くとがった目をしていた。髪と同じ色の瞳はそこらをさまよって、それから私を見た。
「だ、だいじょうぶ？」
男の子は、口をパクパクと何度か動かすだけで返事をした。
「病院。そうだ、病院につれていかなきゃ」
電灯はそこらへんにほうり投げたままだけど、また後でとりにくればいい。
電灯よりは命を大切にしないと。いまこの子を助けられるのは、私だけだ。
「いまつれてくから」
男の子は力弱く首を横にふった。
「バカいわないの！　死んじゃうわよ！」
私たち大人はまだいい。少々ぬれても風邪はひかない。ひいてもそんなにひどいものじゃない。
けど子どもはちがう。
ちょっとした気温の変化で風邪をひくし、へたにこじらせたりなんてしたら、あっさり死んでしまったりする。

「ま……まて」
男の子がいった。
「まて……た、のむ、から」
のどが悪くなってるみたいで、声がかすれてる。それでも少しずつは声がはっきりしてきた。
「しゃべらないで、さあいくよ」
「だ、から……まてと、いって、いる！」
こんどはしっかりと声がでた。かわりにゼイゼイと肩でいきをしだしたけれど。
「おんな、びょういん、は、だめだ」
男の子は、
「つれていったら、わしはないてやる……！」
私の首すじに顔をうめて、それっきりしゃべらなくなった。

7：ワガママ

ひたすら首をふってイヤイヤをくりかえす男の子。いっこうにはなれてくれない。

しょうがない、つれて帰るしかないか。それから病院につれていけばいい。

片手で男の子を抱え、もう一方でそこらで雨に濡れている電灯を拾う。

「びょういんは、だめだ！　いかないぞ！」

「わかったから、わかったから落ちついて。しょうがないから私の家につれていくわ」

「ほんとだな！？」

「体あたためて、着替えて、それから病院よ」

「いやだ！　わしはびょういんにはいかないぞ！」

「はいはい、とにかくおとなしくしてなさいよ」

なんだか心配するのもバカらしくなってきたわ。

頭から足までびっしょりな私たち。下着なんてぐしゃぐしゃになってしまってる。くわえて、この男の子だ。ひっついてはなれないから不愉快感はどんどん上昇中だ。

「くそ、あたまがぐらぐら、するぞ」

「おとなしくしといてよ。すぐに家だから」

「さ、さむいぃ」

ずびびぃーっ。

このガキ、人の服で鼻水ふいたな？

「クソガキめ」

「うるさい。はやくあるけ。わしは、さ、さむいのだ！　ぎゃんっ！」

ピィピィわめくから、おもわず手がでちゃったじゃない。

「しりをたたくな！　わしは、びょうにんだぞ！」

「病人なんて難しい言葉、よく知ってるわね」
「おまえよりはあたまはいいんだ！　ぎゅむっ！」
まだわめくか。
頭をぐいと肩におしつけた。
しばらくはむごむごと文句をたれていたけれど、だんだんおとなしくなってくる。
「なら病人らしく、おとなしく、しずかに、抱かれてなさい」
男の子はそれっきりしゃべらなくなった。
家に帰ってすぐに、男の子をバスタオルでくるんでふいてやった。髪の毛があまりにもひどい。
長さは不ぞろいで、一番長いのは床をひきずっている。でも、全体の印象はショートカットが少しのびた感じ。前髪の一房が、てれんと肩すぎまでたれている。無理矢理エクステで長髪にしたみたい。
虐待とかかな。病院はいやだっていうし、ばれたくないとか。
押し入れにあった電気ヒーターをだしてやる。スイッチを回し、男の子の前においた。
「そこの前でまってなさい」
「ひとりにするのか？」
さびしげな声に、つい「ならついてきなよ」といってしまいそうになる。それをぐっと我慢し、
「着替え用意してくるだけよ。それとお風呂の用意。すぐに戻るから」
「しょうがないからまっててやる」
男の子は、どこまでも上から目線だった。

8：悪魔の飲み物

ほどなくしてお風呂がわいた。男の子の身ぐるみをひっぺがしてお風呂場に投げてやった。「このおにおんなーっ」って叫び声がしたけど、私はしーらないっと。

あの様子ならひとりでお風呂は大丈夫かな。いちおう脱衣場には私が控えているし。

男の子がお風呂にはいっているあいだに、私は自分の着替えをちゃっちゃかすます。

洗濯機に私とあの子の服をぶちこんでスイッチをいれた。洗剤はすこし多めなのは、なんとなくだ。

「いつまでそこにいるんだ」

「だってぼくがおぼれたら大変でしょう」

風船をわったような大声で、

「ひとりでふろくらいはいれるわ！」

といわれてしまった。心配は心配だけど、しょうがない。これ以上さわがれるのは勘弁だわ。

男の子がお風呂にはいってるあいだに、ホットミルクをつくってあげようか。

「あ、牛乳ない」

冷蔵庫には豆乳と飲む乳酸菌しかなかった。

「豆乳？　や、意外とホット乳酸菌も」

いやまてよ、あったかい乳酸菌ははたしてだいじょうぶなのかな。乳酸菌は「菌」っていうくらいだから、生き物だよね。それを加熱したら……。

「想像するのはやめておこう」

ぺたぺたと足音がした。だんだん近づいてくる。

「おい、あがったぞ」

「あがったんだね。て、髪の毛ちゃんとふきなさいよ。ただでさえ

髪の毛ひきずってるのに。自分の歩いたあとは見た？　ナメクジがとおったみたいになってるわよ」
「ふん。ほっとけばかわくだろ。問題ない」
「だれがそのぬれた廊下をふくのかな？　ん？」
「ふいてくれるのか。よろしくたのむ」
「それが人に頼む態度か！」
さっきの弱々しい姿はなくなった男の子。言葉をはっきりとしゃべれるくらいには回復したみたいで、一安心だ。
でもこの態度はひとすぎる。いただけない。将来がどうなるやら。
「そんなことよりも！　豆乳はともかくあったかい乳酸菌は悪魔の飲み物だ！　なぞの酸味にえもいわれぬあの後味！　うう、わしは二度と飲みたくないぞ！」
どうやら一度あったかい乳酸菌は飲んだことがあるみたいだ。悪魔の飲み物って比喩するんだからそうとうな味だとみえる。
ふむ、
「なら乳酸菌にしようね」
「女！　だからイヤだといってるだろう！」
男の子に素早く飲む乳酸菌がはいった紙パックを奪われてしまった。こぼされては大変だから、すぐさま奪いかえす。
「ただの冗談よ」
男の子は眉間にぐっとしわをよせる。
「ウソだ！」
「ほんとに冗談よ。第一、そんなおいしいかまずいかわからないもの、確認せずに飲ませるわけないじゃない」
「目が本気だった！　わしは見たぞ！　絶対に本気だった！」
だぶだぶのロングTシャツを握ってギャンギャンとほえまくる男の子。
顔つきがかわいらしいから、ほほえましい。
あれ、まって私。
このさわがしさになれてきてない？

「さて、ぼく。ならココアなんていかが？」
「……しかたがない、そこまでいうなら飲んでやる」
弱ったり、わめいだり、怒ったり、静かになったり。
「子どもって見ててあきないわね」
男の子が「子どもじゃない、もう立派に成人しとるわ！」とキャンとほえた。

9：ぺしぺしぺし

紅茶とココアを両手に、男の子がまつリビングにむかう。紅茶が私のだ。基本的に、私は一年中熱いものしか飲まない。冷たいのを飲むのは、外食くらいなのよね。

時間はもうすぐ十一時になる。雨は帰ってきたときほどひどくない。

男の子は、私のお気に入りのクッションを抱えて私をまっていた。赤い折りたたみのテーブルをだしてやり、男の子側にココアをおく。男の子はそれにとびついた。

熱いのが苦手なのかな。

はふはふしながらココアを一生懸命に飲もうとしてる。

しゃべらなきゃ可愛いわあ。いやされるわあ。

口まわりについたココアをティッシュでふいてやる。

男の子は文句をいわずに素直にふかれる。

可愛いよ、小動物みたいで可愛いよ。

「いつまでそんな目でわしを見る。幼児趣味か」

「よし、撤回だ。可愛くないわ」

顔だけか、この可愛さは！

「それよりもだ」

「なあに？」

「ココアだけじゃたりなくて、だな」

ぷっくりとマシュマロほっぺたをふくらました男の子は、ペシペシペシとテーブルをたたきだした。

「腹がへった。女、砂糖はないか。わしは砂糖が食べたい」

「は？」

「腹がへってたまらん。それにいまはとにかく甘いものがほしい……！」

ほんとにお腹が空いてたまらないのかもしれない。

砂糖くらいいくらでもあるけど、「砂糖がほしい」って切羽つまりすぎでしょう。
私、この子に「砂糖しかくれなさそう」とかおもわれてるのかしら。
「たしかゼリーとクッキーがあるはずだけど、食べる？」
「食べる！　あとココアがまだほしい！」
「どんだけ腹ペコよ」
「しょうがないだろ。ここ一ヶ月くらいはまともに食にありつけておらんのだ」
それは親にご飯をたべさせてもらってない、と解釈してもいいんだろうかな。
それがほんとなら、いち早く保護してもらったほうがいいんだけど。
明日男の子にばれないように警察に連絡するしかないかな。
私は男の子にクッキーとゼリーをだしてやりながら、計画をたてる。
「ふおぉぉ、久しぶりのご飯！」
うれしそうにかじりついた。
むぎゅっ。
はむっ。
かりかりかりかり、ごっくん。
「あっちぃ！」
そりゃいれたてのココアは熱くて当たり前だと思うよ。

１０：混乱してきた

男の子がクッキーの粉だらけの両手で、ぱちんと口をおさえた。
やけどしたかな。口の中をやけどするのは地味にいたい。その気持ちはよくわかるよ。
私は熱さでふるえる男の子の横に移動した。
「お水あるよ」
氷がたっぷりはいった水をココアの横においてあげる。
目にも止まらない早さでコップをひったくった男の子は、ぐいといそいで飲んで、熱を中和させようとする。
それは逆効果だとおもうよ……。
案の定、こんどは水の冷たさでピクピクしだした。
「こ、これが、呪いか！」
確実に自分の不注意でしょうに。
意外にも、男の子は身長があった。
中型犬より一回り小さいとおもっていたけど、それは足を抱えてまるくなっていたからみたい。身長は一メートルとすこしくらい、ただ体に肉がないからとても幼くみえる。。
「すこしは満足した。うむ、いつの世も甘いものは正義だな」
辛いのが正義の人もいるとおもうよ。
「いつまでもお前を女と呼ぶのは不便だな。名はなんだ」
「お前って。せめてお姉さんてかいえないわけ？」
「あいにく年下をお姉さんと呼ぶ趣味は、わしにはないんでな」
「おとなぶりたいお年頃なのね」
ギッと男の子は私をにらむ。
「違うわバカもん！」
ちっこい指が私をさす。
「事実だ。わしはお前より、はるかに年上だ。いいかげんにわかれ！」

「……おむかえにきてもらうのは、ママとパパじゃなくて、学校の先生とかのほうがいい？」
「しらんぷりするなー！」
そこで、ピィピィわめいていた男の子がぴたりとそれをやめた。
「なんどもいっているのに理解できんとはな。さてはお前……脳みそがすっからかんだな？」
「はーい、ちょっとお口チャックー」
「ぐ、なぐることはなかろう！　暴力は人類の敵だぞ！」
「これは教育です」
だから、問題ございません。
ギリギリと歯をならして私を威嚇する男の子。まったくこわくない。
それにしても、いまいちこの子がどういう子なのかがつかめない。自分のことを「わし」っていうし、私を「女」とか「お前」とか呼ぶし。そして自分を「年上」っていうし。ごっこ遊びの延長線にしては、なりきりすぎるよね。しゃべり方なんて、古風というか年寄りくさいというか。
「ねえ、どうしてあんなとこにいたの？」
そこだ。
一番の、なぞ。
こんな時間、天気も最悪、病院はいやだと駄々をこねて、つれて帰ればやせっぽちの体つき。
あのまま私が気づかなかったら、きっとこの子……。
「いや、それは」
男の子は目を泳がせて口をもごもごさせる。
「だいじょうぶ、ちゃんと聞くから」
「わ、わらわんか？」
「うん、約束するわ」
「ほんとだな？」
「指切りする？」

「あれは悪人にやる罰だぞ。するわけないわ」
指切りが罰！？
ほんとにどういう教育を受けてるのよ。
「そこまで聞きたいならしょうがないな。特別に話してやらんことはない」
やっと話す気になってくれたみたい。
「ただし、絶対に笑うなよ！」そんなに恥ずかしいことなのかな……虐待かもとかおもってたけど、違うのかな。私のおもい違いとか、いや、でもなあ、あんなかっこうでいたしなあ……。
「――天川（あまがわ）に年に一度、橋がかかる。それは今宵だ。で、だな。知り合いのバカップルが……その……その天川橋で、アッハンウッフンするから……あばよくばでばがめしてやろうとしたら、おとされてしまって……うむ、そういうわけだ」
「まさかの自業自得なの！？」
そして天川って、どこ。

11：七夕物語

「天川は天の川のことだ。今日、七月七日は、こっちじゃ、あー、なんだ、たなはた？　か？　いや、ちがうな……はなはた！」
「七夕よ、た、な、ば、た」
「わ、わかってるわ！　だまって人の話はきくもんだぞ」
私の指摘が恥ずかしかった男の子は、えらそえに「んんっ」と咳払いをした。
「たなばた、うむうむ、七夕だ。
七夕の由来くらいはしってるだろう。やれ織姫だの彦星だの、の話だ」
彦星と織姫が年に一度会える、て話だよね。由来とか伝説はいろいろあるけれど、肝心なとこは「年に一度会える」ってとこだろう。
「あれの八割は、美化されている」
ひょいっと男の子はクッキーを口にほうりこんで、
「事実は、もっとあほらしくて酒の肴にもならん」
さめたココアをイッキ飲みした。
「おかわり！」
「まだ飲むの？」
「あと十杯は飲めるぞ！」
自慢にもならない自慢だよ。
しょうがないからいれてあげることにする。
年に一度橋がかかるとかは、七夕の「織姫と彦星が年に一度会える」からきてるんだろう。けどそれはただの昔話だ。現実にありえる話じゃあない。ちゃんと聞くと約束したけど、それを信じるかどうかは別の話だ。
食パンがあったから、それにたっぷりとイチゴジャムをぬったのをココアといっしょ持っていく。焼いてないからパリッとはしないけど、これはこれでけっこうおいしいんだよね。私の好物。

男の子はそのジャムパンにかじりついた。
気にいってくれて、なによりなにより。
「『もーチョー信じらんなーぁい！　ダーリンとせっかくラブラブできるのにのぞき見とかぁー！』と織に――織はこっちでいう織姫のことだ――怒られてしまって……こう、げしっと。ここから少しはなれた林に落とされたわ。せっかく情事をでばがめして、それをネタにしばらく衣食住の面倒をみてもらおうと計画しとったのに……台無しだ」

12：ウソかホントか

こうもありえないことをさも事実っぽく話されてもなあ。
七夕の物語は、両親が話してたのかもしれない。昔話とかを自分でアレンジして話す親は、多いだろうしね。
「笑わんかったことは、ほめてやる。しかしな、お前、しんじてはないだろう？　これっぽっちも、な。これだから、その頭の中が、すっからかんと、おもわれるのだ！」
「あのね、夢を壊すようで悪いけど、そういうのは、ただの言い伝えよ？　昔からある有名なね」
「ちがう、ちがう。言い伝えとかいうのではなく、事実だ。いまの世まで話が残っているのは、そういうふうに話が残るよう、裏で意図的に伝えている者がおるからだ――当の本人たちが、いいように話を流せば、自分らにデメリットはなかろう」
「自分でいいように話をすればあたり前ね。けど、証明できないわよ。私からすれば、ただの童話とか昔話とか、そんなんでしかないわ。
だから、ごめんなさいね。信じられないの」
男の子は不満げに顔をくもらせた。愛らしい顔に似合わないシワがよる。
「ええい、まったく。こうも、話がうまく伝わらんとは。女――んん？　そういえば、わしは……ぉお！　女、さっきわしが名をきいたのに、なぜ答えない！」
あまりに理不尽なことをいいやがった男の子は、残りすくないゼリーを八つ当たりといわんばかりにスプーンでつき刺した。ダンッダンッと、意地汚くふり下ろされるスプーンは、いびつにゼリーをゆがめる。ただし、ごろごろはいっているフルーツは、うまい具合によけている。
「名前をしりたいときは、自分からよ。おわかりかしら、おぼっち

ゃん？」
「どうやら目上へ対する口のきき方をしらないらしいなあ」
「それよ、それ。まず、その話し方。よくないわ」
男の子は、握っていたスプーンを置いた。
年上には敬語。
それは、あたり前のことじゃない。
小学低学年でも、ある程度は守れるお約束。私は、男の子はわざとこういう話し方をしているとおもっている。子どもの中には、わざと大人を怒らせて、その反応を楽しむような子もいるかもだけど。男の子は、それにカテゴリーされるかもしれない。
「ふむ。ここはわしがひとつ、大人な対応をしてやろう――右手をかせ」
ちいさい紅葉のような手が、しっかりと私の手をにぎった。

１３：感じるままに

男の子の両手は、子どもらしくふくふくとしていて、さわり心地がすごくいい。何度か手のひらをひっくり返し、親指と小指をそれぞれ握る。

「頭がかたい大人には、実際にしてみせたほうがよかろう――いいか、素直に。それがなければ、これに意味はなくなる」

男の子は目をつぶり、額を私の手に押しあてた。

あたたかななにかが、男の子がにぎった手から体に流れてきた。血管をとおり、循環し、内蔵のすみずみへ、足先へ、ゆっくりとしかしはっきりとそのあたたかな流れはとぎれずに。

唐突に。私は目が熱くなった。ぐっと目頭に熱が集まり、しずかに涙が流れた。

「いや。なによ、これ。私に、なにしたのよ」

なんでとまってくれないのよ！

ぐっと目をつむって流れる涙をとめようとしても、まったくとまってくれない。この年でこんなに泣くなんて、恥ずかしい。

私がぽろぽろ流れる涙をとめようと四苦八苦しているのに、男の子は気づきもせずに、その行為をやめてはくれない。私がこの手をはらえば、きっとこの不思議な現象はとまるだろう。無理矢理手をにぎりなおし、またするようなこともしないとおもう。

けれど、なぜだかこの小さな手をはらうことは、できなかった。

「ふむ、お前はどうやら、わしとの波長が合いやすいようだ」

ささやくような小さな声。「少し……おさおねばならぬか」私の手をにぎる男の子の力が少し弱くなる。けど、私の中を流れるそれの強さはかわらない。

男の子のちぐはぐな長さの髪の毛が、しずかに宙にうかんだ。髪先がゆらゆらと水中をゆれるように動きだした。

「な、な、な」

言葉にならなかった。
現実ばなれしすぎなこの現象は、私の思考を停止させるには十分すぎるものだった。
「いまわしは、お前にわしの魔力を流しておる。親指から体内を血流にのって流れ、小指からわしの体内にもどるようにな。しかし、お前はわしとの同調具合がよすぎ、いくぶんかは、涙といっしょに排出されておるのだ。さすがにもったいないので、わしなりの形で回収させてもらっておる」
男の子が「少々明るすぎるな」とつぶやいたと同じくして、パチンと部屋の電気が落ちた。

１４：魔法使い

泳ぐ男の子の髪が、うすく光をおびていた。髪の動きにあわせて光も動く。私と男の子のあいだに、小さな光の粒子ができてきた。それは、私たちを中心に渦をまいて、部屋いっぱいに広がっていく。

「――……きれい」

「だろう。まさか、わしもこうなるとはおもいもしなかった。この発光するひとつひとつが、わしの魔力の結晶だな。ユカリと同調し、それから増幅されて、こうして吸収しきれんかった分が、空中にただよっておる」

「あ、名前」

私、まだ名のってもないのに、なんでしってるんだろう。

「魔力がもどってくるさいに、いっしょに流れてきたからな。どうだ、体の熱と涙はひっこんだだろう」

「たしかに、いわれてみればなくなってる」

体のなかをなにかがめぐっている感覚は残ってるけれど、あの熱さはまったくなくなっている。そして、涙もぴたりととまっていた。

「さっきもいったが、これらはわしの魔力の結晶だ。いま、わしのもつ魔力は枯渇状態であり、肉体をけずり生命を維持さている状態だ。さっきの空腹はそこからきている。食事での魔力回復には、糖分を摂取するのが手っ取り早い。

ユカリ、礼をいわせてほしい。お前のおかげで、いま、わしはこうしていられる」

花のような笑顔をうかべて、男の子は顔をあげた。

あの横暴でワガママな姿でいままで話していたから、きゅうにそんなふうにいわれても、どこかこそばゆくてたまらない。

「林に落とされてから、わしは近くの廃屋にあった布っ切れをひっつかんで、ひたすら歩いた。歩いて、歩いて、ひたすらな。ただでさえ、体内魔力がない状態でのことでな。体は歩くたびにちぢんて

いくわ、魔力の消費をおさえようとこの髪を贄とし、魔力回復をはかったが、無駄におわるばかり。消費のほうが激しくて、焼け石に水みたいなものだ。街にでれば、だれか知り合いがいるかもとおもうだが、みないなかった。そこらの人間は、わしをじろじろ見るが助けてもくれない。声をかけてきた者もいたが、いやしい目をしてるやつばかり。わしはつかれておった。くたくたのへにゃへにゃにな……じつはな、干からびて死ぬかもしれぬとも、覚悟したよ」

男の子の顔が、だんだんと距離をちぢめて近づいてくる。こころなしか、瞳の色がさっきよりも濃くみえる。表情は子どもにあわない、大人びた真剣な顔。

「わしの名はソーマ――魔法使いだ」

最後のほうは、あまりききとれなかった。ぐっと意識が遠くなったからだ。私と男の子――ソーマとの間は、ほんの少ししかなくなっていた。けど私は、ソーマの顔を薄いフィルターをひとつはさんでいるようにしかみえなくなっていた。くらい部屋に不思議に光るソーマの髪と、ルビーよりも紅い瞳だけが、色をもってみえる。

「もったいない、もったいない。すべてだ。こうも魔力がにげるのは。なぁに、すぐにおわる――そぉら、いただくぞ」

唇に、ソーマの甘いココアの吐息がかかる。

――――私の意識は、そこからまったく、ない。

15：夢じゃなかった

いつもと同じようにコーヒーメーカーにスイッチをいれ、リビングのカーテンをあける。

時間は朝の九時、すこし遅い目覚めになった。

昨日の激しい雨があったのは、ウソみたいな空が窓越しみえた。雲ひとつない空。私の気分とは大違いだ。くそ、なんてにくたらしい青空め！

「なにをしている。わしに早くミルクをいれてくれ」　赤いソファ（特等席）に座って、かわいらしい顔の男の子は、テレビのチャンネルを片手に不満をもらす。

ソーマ。それは、この自称「魔法使い」で「私より年上」らしい、この男の子の名前だ。

「魔法使いだとしんじてない？　昨日、あれだけのものを見せてやったのに。ユカリの頭ん中は、冬眠中らしいな」

いったい私はなにをみたんだ……とりあえず、腹立ついい方をしたソーマの頭に、教育という拳を落としておく。予想外で「ピィ！」となった男の子は、テレビのリモコンをついほうり投げてしまった。リモコンは弧を描き、きれいにソーマの頭に落ちた。

かわいそうに、リモコンには落ちる先さえ選択する権利はないんだよね。ソーマにばれないように、リモコンに黙祷をささげる。

昨日、私の記憶は虫食いでしか残っていない。すべて忘れてはいないが、微妙なかんじにしか頭に記憶されていない。

雨の中男の子を家につれ帰った。

お風呂をかしてやった。
ココアを入れてクッキーとゼリーをだしてやった。
それから。
それから……なんだっけ？
たしか、私は、昔話を聞いて――なにか光って――男の子が「わ――なはソーマ――ま――いだ」やっぱり、断片的にか脳みそは記憶してくれてない。
「ミルクは冷蔵庫にあるから勝手に飲んでいいわよ」
「ついでくれんのか」
「なんでつがなきゃいけないの？」
私が「好きなだけついでいいから、自分でするのっ」と小さな抗議をすると、ソーマはしぶしぶといった様子で台所に消えていった。片手にビールジョッキを持ってだ。
私が目をさましたのは、自分の部屋のベッドの上。昨日着替えたままの格好で、タオルケットを頭からかぶっていた。
まずはじめに、昨日拾った男の子「ソーマ」が、夢でないかたしかめることにした私は、ボサボサになった髪をなおすこともわすれて、リビングに急いだ。
いない。ヤツはいない。やっぱり、あれはちょっとした夢だったのよ。
「なんだ。なかなかに早い目覚めなんだな」
ボーン、と部屋の時計がご丁寧に九時を告げてくれたと同じく、夢でみ赤茶髪が台所から姿をあらわした。

16：チャイルドシート

夢の中の登場人物が、現実世界の人物になった瞬間だった。
「食パンがなくなった。あとジャムもない。けど、ちゃあんとユカリの分のミルクは残しておる」
「コップ半分も残してないじゃない」
「わしは、育ち盛りだからな。そ・だ・ち・ざ・か・り」
私より年上っていう設定はどこにいった。
ソーマは、子どものくせによく食べる。食パンは三枚、目玉焼きにゆでたブロッコリー、カップヨーグルトを二つ、牛乳はジョッキで二杯とすこし。この小さな腹ペコくんのせいで、わが家は食料危機になってしまった。一人暮らしだから、あまり買い置きをしていなかったとこに、この大食いボーイの襲来だ。買い出しにいかないと、夕ご飯は白米にかつお節の猫マンマで確定だ。
「午後から出かけるわ。おとなしくまっててちょうだい」
パイン缶詰を抱えているソーマ。はあ、好き勝手に食べすぎなのよ。いちいち気にしてたら私が持たないから、ほっとくことにしましょうか。
「お昼は用意していくわ」
「わ、わしも、いく！」
「無理よ。ソーマはお留守番」
「なぜだ」
「だって、あなた……」
これはだれでもしっている、基本的で当たり前なことだけど、
「チャイルドシート、ないから車に乗れないわ」
「なぜわしがチャイルドシートを使わねばならん！　わしはユカリより、としう、え……む、わしはいま子どもか？」
自分が子どもの姿をしていることに、いまやっと気づいたか。
ソーマは真一文字に口をむすんで、行儀悪く座りなおした。

「仮にわしが、チャイルドシートが必要じゃない年なら、問題ないな？」
私はうなずくだけで返事をした。
「人間、そんな一二時間で成長したりしないわ」
「“できたら”問題ないな……？　そう解釈するぞ？　いいな？」
なんでそんな不可能なことときくんだろう。
「“できる”なら、どーぞ」
まあ、無理でしょうけど。

17：悪魔は屋根裏にいる

「ふふん。その言葉、忘れるな！　ふはははは、ふはははは！」
頂き物のようかんを最後のデザートにし、かわいらしくて目付きが最悪に悪い、邪悪な魔法使いの高笑いがこだました。
ソーマはすぐに私の家からでていく気はない様子だ。「病院はならん、警察など問題外だ、わしは拒否する」と呪詛のようにつぶやくから、もうつれていくのはあきらめた。
「おとなは子どもを守るべき。だから、ユカリはわしを住まわせて、守るべき！　ん。われながら頭いいな」
めちゃめちゃなことを言いやがる赤茶の悪魔。コイツを私の部屋で寝させるのは、絶対に、イヤ。
「寝る場所がちゃあんとあるなら、わしはどこでもかまわんぞ」
ソーマがそういうので、私は屋根裏に案内した。
私の家は二階建てになっている。一階は、リビングにキッチン、トイレ、お風呂、物置。二階は、私の部屋、死んだ両親の部屋、半分が物置になってしまってる書斎もどき。お父さんが本を集めるのが好きだったから、ジャンル問わずの混沌とした書斎は、もしかしたらその系のマニアには宝の山かもしれない。
外観からじゃわかりにくいけど、小さな屋根裏が実はある。そこにいくには、折り畳み式の階段をだすしかない。まだ私が小さいころは、お父さんとよくいっしょにそこで寝たりしていた。
屋根裏はちょっとした秘密基地みたいになっている。折り畳みのすこし小ぶりのベッドがひとつ。分厚い洋書が適当にそこらにあって、小さな天窓がある。屋根裏の二割をうめている衣装箱は、お母さんが集めていた歯切れや、どっかの民族の織物がギュウギュウにつまっている。この屋根裏は、年に何度かは使うから、そう汚くない。
朝ご飯を食べてから、ソーマはそこにこもっている。ときおりド

タンバタンと騒がしい音がする。
「お願いだから破壊活動だけはやめてよぉ……」
音がしなくなったのは、それから三十分くらいあと。ソーマのお昼の用意ができたころだった。
「しずかになったわね。やだ、なんだか悪寒がする。風邪かしら」
さむいわけじゃないのに、気持ち悪いなにかが背筋をついとなでるような。
それの正体は、屋根裏からもったいぶっておりてきた、ヤツかもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0245z/

魔法使いを拾いました

2011年12月17日23時45分発行